第1特集

子どもの未来につながる力を幼児期から育む

OECDが提唱する「社会情動的スキル」を幼児期に育成する重要性について、
世界的な認識が高まりつつあります。では、社会情動的スキルとは、
具体的にはどのような力を指すのでしょうか。また、どのように保育の中で育むことができるのでしょうか。
座談会と具体的な事例を通して、子どもの未来につながる力、
社会情動的スキルについて深く考えていきましょう。

座談会

今、OECDなど世界が注目している「社会情動的スキル」とは？

社会情動的スキルは、従来の日本の幼児教育・保育をより向上させる大きなきっかけとなる概念と言えます。
東京大学の秋田喜代美先生、並びに保育現場から園長先生と主任の先生が、
社会情動的スキルを軸にして、これからの幼児教育について語り合います。

社会情動的スキルとは何か

東京大学大学院教授
秋田喜代美
あきた・きよみ

今後、社会で求められる能力の土台となる目に見えにくい力

――本日はよろしくお願いします。最初に「社会情動的スキル」とは何か、秋田先生に解説していただきたいと思います。

秋田　まだ日本ではなじみが薄い言葉ですが、社会情動的スキルはＯＥＣＤ（経済協力開発機構）などが提唱している概念です。OECDは、これからの社会で、複雑な要求や課題に対応することができる力を「コンピテンシー（能力）」と定義していますが、近年、コンピテンシーは、知識や技能だけではなく、意思や意欲といった「情動的」な側面に支えられていると考えられるようになりました。こうした目に見えにくい力＝姿勢や能力などを測定し育成するために、社会情動的スキルという概念を設けたのです。OECDは、2030年における学校のあり方を検討していますが、その中で社会情動的スキルは、「態度（アティチュード）」のひとつとして、重視されています。

社会情動的スキルが対象とする範囲は広いですが、「目標の達成に向かう力」はそのひとつです。目標に向けて何かを成し遂げるためには、「これをやりたい」という情熱をもち続けたり、我慢してやり続けたりする忍耐力や自己調整も必要になります。さらにより大きな成果を生み出すためには、「他者との協力」も必要です。そうした人間関係を構築するためには、社会性も大切ですし、相手に敬意や思いやりをもつことも重要です。またうまくいかないときにストレスに対処するために、「情動を抑制する力」も求められます。

社会情動的スキルの定義と測定は、OECDでも議論の最中にあります。こうした姿勢や能力が中心になるとお考えください（図１参照）。

認定こども園あかみ幼稚園
（栃木県・佐野市）
園長
中山昌樹
なかやま・まさき

図1

幼児期から青年期に育みやすい

OECD発 社会情動的スキルとは？

幼児期から育むことが将来につながる

＝

目標の達成	他者との協力	情動の抑制
・忍耐力 ・自己制御 ・目標への情熱	・社交性 ・敬意 ・思いやり	・自尊心 ・楽観性 ・自信

出典：OECD 資料（社会情動的スキルのフレームワーク）

社会情動的スキルに関する報告書（OECD 作成）は、ベネッセ教育総合研究所のＨＰで今年の夏以降、公開する予定です。 http://berd.benesse.jp/

実は日本の保育が大切にしてきた「心情・意欲・態度」に近い

太田　最初に社会情動的スキルという言葉を聞いたとき、大学の講義に出てきそうな感じがして、具体的な子どものイメージと結びつきませんでした。秋田先生の説明を聞いて、自分の中で、「がんばる力」「大人になるための根本となる力」「生きていく力」といった言葉に置き換えられるのではないかと思いました。

秋田　その捉え方でいいのだと思います。社会情動的スキルという言葉はともかく、考え方は新しいものではありません。数年前、ＯＥＣＤの会議で初めて社会情動的スキルという言葉を耳にしたとき、「これは日本の幼児教育・保育が大事にしてきたことだ」と感じました。日本が最も重視してきた「心情・意欲・態度」と重なるところが多いのです。

中山　具体的な子どもの姿を通して社会情動的スキルを考えると、「自身の存在を受容され、安心して外界に関わり、意欲に満ちている状態」をイメージします。秋田先生がおっしゃったように、これまで私の園でも、保育の中心に遊びをおいて、社会情動的スキルという言葉で表されるような力の育成を目指してきたと思います。

太田　お話を聞いて、子ども自身からわき出る意欲をもとに活動をつくり上げることが、社会情動的スキルを育てるうえで大切ではないかと感じました。ふだんの保育では、例えば、工作コーナーには子どもが興味に応じて遊べるようにいろいろな素材を用意し、さらに「こんなこともしたい」という声が聞かれたら、遊びが広がるように援助します。そのように子どもの気持ちからスタートして意欲を引き出す保育を通して、無意識のうちに社会情動的スキルを大切にしてきたのかもしれません。

みやざき保育園
（神奈川県・川崎市）
主任
太田亜希
おおた・あき

なぜ今、社会情動的スキルが重視されているのか

子育て環境や社会の変化を受け子どもに育てたい力がより明確に

秋田　これまで大切にされていたにもかかわらず、今なぜ改めて社会情動的スキルが重要視されているかというと、海外の研究に基づいた新たな概念が発表されたことで、日本でも取り入れようとしているだけではありません。確かに日本は「心情・意欲・態度」を大切にしてきましたが、実際、十分に育っているかどうかと言えば話は別です。なかでも、年齢が上がると、挑戦したり、やり遂げたりする力に課題が見られる子どもも見られます。また、主要な社会情動的スキルのひとつに協同する力がありますが、これは単に友だちと仲良く遊べればよいのではなく、異質な相手と折り合いをつけて、一緒に課題を追求するような姿を想定しています。そのように社会情動的スキルという考え方をもとに、改めて保育者がこれまでの実践を振り返ることには大きな意味があります。

中山　その通りだと思います。この頃、就学直前の子どもを見ると、以前に比べて幼さを感じることがあります。「もう１年あれば…」と、焦りのような気持ちを抱くこともあります。おそらく、かつては社会情動的スキルとして表されるような力が、自然に育まれる社会環境があったのでしょう。降園後に異年齢の集団で遊んだり、ご近所付き合いの中で地域の大人から叱られたり、地域コミュニティで社会情動的スキルが育っていたから、園はことさらに意識する必要がなかったのだと思います。

ところが、時代とともに地域社会のあり方が変化して、子どもの姿も変わってきました（P.5 図２・３参照）。これまで園が無意識に大切にしてきたこと、また当たり前と考えてきたことに明確な意味づけをして、保育や園運営に取り組まなければ、今後、立ち行かなくなりそうだという課題意識を抱いています。

秋田　そうですね。目の前の子どもが社会に出る20年、30年後は、さらにグローバル化が進み、今以上に多様な文化背景をもつ人々の協働が求められる世界になるはずですから、異質な人やモノに適応する力を乳幼児期から育てる必要があるでしょう。今後の社会の中で、いかに従来の幼児教育のよさを生かせるかを考えるうえで、社会情動的スキルは重要な概念と言えるでしょう。

社会情動的スキルを伸ばすためのポイント

具体的な姿に落とし込んで社会情動的スキルを育てていく

――次に社会情動的スキルを育てるために留意すべきポイントを教えてください。

秋田　ＯＥＣＤでは、社会情動的スキルをどう育てるかという大きな枠組みをつくろうとしていますが、これは目の前の子どもに責任を負う保育者が実践すべきこととは別の話です。現場の保育者は、子どもの実態を踏まえて、「こういう子どもの姿を捉えたい」「このあたりに気をつけて保育をしたい」など、社会情動的スキルを具体的な子どもの姿などを自園ならではの言葉に落とし込んで考えるといいでしょう。その際には、社会情動的スキルという目に見えにくいものを、自分たちの言葉で「見える化」することが大切です。

日本の子育て環境の変化　平日、友だちより母親と遊ぶ子どもが増えている

Q. 平日、（幼稚園・保育園以外で）遊ぶときは、誰と一緒の場合が多いですか？

図2 幼稚園・幼児（平日一緒に遊ぶ人）

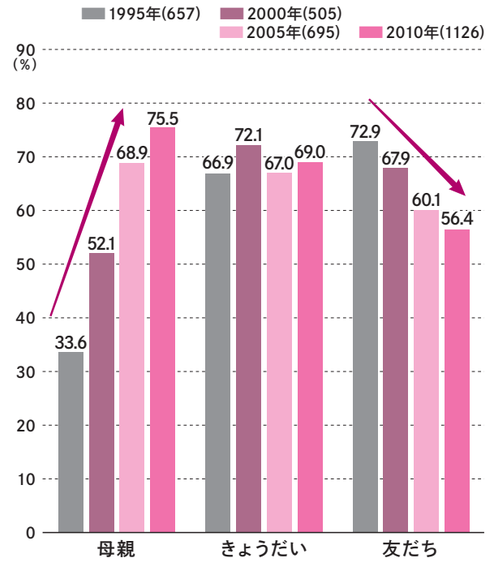
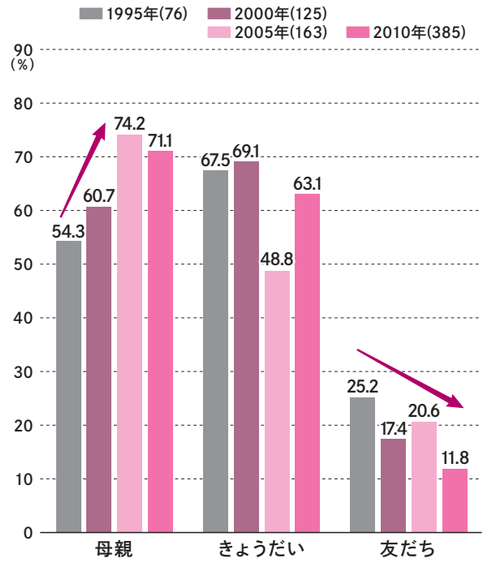


図3 保育園・幼児（平日一緒に遊ぶ人）



※複数回答。※「その他」を含む９項目の中から３項目を図示。※幼稚園・保育園に通う３歳11カ月～６歳11カ月の幼児。
※（　）内はサンプル数。

◎平日に子どもが降園後に遊ぶ相手は、「母親」が増加し、「友だち」が減少していることがわかります。保育園に通う子どもに比べ、降園後遊ぶ時間が多く取れる幼稚園児も、友だちと遊ぶ機会は減っています。背景には、少子化や遊び場の減少、遊びの内容の変化、また保護者の安全志向の強まりなどがあると考えられます。

出典／ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート」

例えば、ある園では、子どもが没頭したり夢中になったりする姿を捉えるために、「『もう一回』と言える子どもを育てたい」という言葉を用いていました。子どもの姿から出発した、とてもよい表現だと思いました。自園ではどのような社会情動的スキルを育てたいかが決まったら、研修などを通して「こんな場面で育っている」「こういう援助をしたら乗り越えられた」といった具体的な事例を共有し、支援のあり方を考えていくといいでしょう。

中山　社会情動的スキルを育てるための“必修科目”は、生活の中の「遊び」だと思っています。どの子どもも思いきり遊びたがっており、遊びの中で困ったら大人の援助を得る権利をもっていると、私は考えています。保育者の側には、「こんな活動をしてほしい」といった願いに基づく環境構成がありますが、子どもにとって、そんなことは知ったことではなく、楽しく遊べればそれでいいのです。保育者は、ねらいにこだわり過ぎず、少しでも遊びが充実し、子どもが探求する姿を見せるような努力を続けることが、社会情動的スキルを育むための大前提になるのではないでしょうか。

太田　中山先生のお話から、子どもの気持ちをもとに遊びを進めることの大切さを改めて考えました。予定通りに活動が展開せず、子どもがまったく異なる遊びをしたがることは多々あります。もちろん、保育の

ねらいをもとに環境を準備することも大事ですが、それよりも、子どもの意欲を捉えて尊重したり、子どもと一緒に考えようとする姿勢が大事だと思いました。

充実した遊びや生活の中で結果的に身についていく力

秋田　社会情動的スキルを育てようとするのではなく、いかに遊びを豊かにするかという視点をもつことが先決です。子どもが自信をもって安心して遊べるためには、保育者をはじめとした周囲がありのままを受け止め、「この場所なら、自分を丸ごと出せる」と思える環境をつくることが大切です。そのために、保育者は一人ひとりの違いを認め、「あなたらしくあっていい」というメッセージを常に伝えましょう。逆に指示や禁止事項が多い環境では、子どもはその場を乗りきろうとすることしか考えません。

またＯＥＣＤでは、大人になって社会に貢献し、幸せに生きるためには乳幼児期にどのような力を身につける必要があるかという、逆算の考え方で議論を進める傾向があります。私自身は、乳幼児期は大人になるための準備期間とは捉えておらず、そのときどきに子どもがいきいきと過ごすことを大切にし、結果的に社会情動的スキルが育つという順序を大切にすべきと考えています。

中山　結果として身につくスキルという考え方は、とても重要だと思います。例えば、けんかは人間関係を学ぶ最大のチャンスです。けんかを通して、相手に気持ちが通じて仲直りする喜び、また自分の思いが通らないときの悔しさなどを体験し、「ひとり遊びもいいけど、友だちと遊ぶともっと楽しい」と実感し、協同性が豊かになり、しだいに役割分担もできるようになります。この中には社会情動的スキルと言われる力も多く含まれるでしょう。それは遊びの結果として得られるのであって、スキルの習得のためにけんかをするわけではありません。

太田　けんかは大事だと思いますが、保護者の中には、とにかく「ごめんなさい」と言わせてトラブルの芽を摘もうとするかたが少なくありません。子どもには、謝ればＯＫではなく、いろいろな解決の方法があることを学んでほしいのですが。

中山　謝れることはすばらしいのですが、それを大人から強制されると、本当に悪いと思っていなくても謝るようになることには気をつけなくてはいけません。謝罪の言葉が緊張した場面から逃れるためのキーワードだと学んでしまうのです。そうした状況では、表面上は友だちとうまく付き合えていたとしても、社会情動的スキルは育たないでしょう。

文字・数などの認知的スキルと関連しながら総合的に伸びる

秋田　社会情動的スキルを育てるためには、文字・数などの認知的スキルとの関係も理解しておく必要があります。一例として、編み物に夢中になっていた子どもの姿から説明しましょう。

編み物をするためには、まず編み方の知識がいりますし、全体のバランスを整えながら編んだり、どれくらいの時間を要するかを考えたりする必要があります。これらは、文字・数などの認知的スキルです。さらに、完成させるためには、コツコツと根気強く続けなくてはなりません。また、その子どもは保護者や担任の保育者にプレゼントしたいという思いに支えられてがんばっていました。こうした意欲や思いは、まさに社会情動的スキルと言えます。

編み物を完成させることができたら、達成感から自信がつくなどして社会情動的スキルが向上するでしょうし、編み物の知識や力も高まるはずです。このように社会情動的スキルと認知的スキルは、関連しながら伸びていくのです。毎日の生活の中にある遊びや活動が子どもにとって意味のあるものであれば、社会情動的スキルや文字・数などの認知的スキルは、総合的に育つと考えていいでしょう。

中山　今のお話は、経験上、とても納得できます。認知的スキルの代表である文字や数は、ワークブックで勉強しなくても、遊びの中で自然と身につきます。お店屋さんごっこのリアリティを追求して文字を使って看板を書こうとしたり、ドッジボールで勝ちたくて人数を数えたりする姿が見られます。

秋田　知的な興味が発端となって社会情動的スキルが伸びることもあります。一例ですが、ある園の子どもと障がい者のかたとの交流では、車椅子への興味がきっかけとなって関係が深まる姿が見られました。

そのように園が地域社会へと活動の場を開き、異質な人やモノと交流する経験を豊かにすることで、子どもの学びは広がっていきます。幼稚園や保育園などは、学習指導要領に基づいて単元や配当時間が決まっている小学校以降とは異なり、地域に根ざした緩やかなカリキュラムを組み立てやすくなっています。幼児期に地域社会に入り込んで探求したり人と深く関わったりする経験などを通し、社会情動的スキルを十分に伸ばしておくと、小学校以降で社会情動的スキルや文字・数などの認知的スキルが雪だるま式に大きくなっていくこともわかっています。

中山　地域活動は本当に有意義ですね。地域の結びつきが強かった昔には戻れませんから、新たな形の地域コミュニティを再構築しようと、うちの園でも地域活動に重点を置いています。そのひとつである農業プロジェクトは、子どもと職員と地域の高齢者が協同し、大豆を育て、味噌を作るという活動です。地域のかたがたが園内で一緒に作業をしますが、そこで保護者や保育者とは異なる大人との関わりが生まれます。単に作業について教えられるだけではなく、ときには叱られるなど、感情面の交流もあります。そうした経験を通し、初めて子どもは地域のかたがたと共生していることに気づくのです。子どもには地域のいろいろな人を結びつける力がありますので、今後、子どもが中心にいる新たな地域コミュニティの再構築に努めるつもりです。

秋田　そうした経験が地域に対する誇りにつながり、郷土を愛する気持ちが育つのでしょう。身近な人とうまく付き合えるだけではなく、地域や社会に参画して貢献しようとする、いわゆるシチズンシップ（市民性）も、大きな意味で社会情動的スキルにつながると言えます。こうした学びは、個々の家庭では難しいので、今後、園として充実させていくことが期待されます。

小学校以降の教育改革とも関連する「社会情動的スキル」の重要性

ベネッセ教育総合研究所 主席研究員
東京大学 客員准教授
木村治生

現在、小学校以降の教育について、「知識・技能」の習得に加え、「汎用的能力」を重視しようという議論が進められています。汎用的能力とは、問題解決力や批判的思考力、コミュニケーション力、情報活用力、計画遂行力といった教科の枠組みを超えた力のことです。社会情動的スキルは、そうした能力のベースになっていると考えられます。

今の子どもたちはグローバル化や情報化が進む変化の激しい社会を生き抜くことや、少子高齢化、環境問題のような山積する難しい課題を仲間とともに解決していかなければなりません。そのため、学習活動では、教師が一方的に指導する学びだけでなく、子どもが主体となって課題を見つけたり、その課題を友だちと解決したり、その成果をまとめて発表したりするといった学び（アクティブ・ラーニング）が積極的に導入されようとしています。また、大学入試でも、多様な能力を測定するために、論述や面談、グループディスカッションなど、従来のペーパーテストだけではない選抜方法が増えていくでしょう。

しかし、こうした能力は一朝一夕に身につくものではありません。これからの社会で不可欠となる汎用的能力を効果的に伸ばすためにも、幼児期から社会情動的スキルを形成していくことが望まれます。

社会情動的スキルを育てるうえでの課題

目に見えにくい力について保護者に伝える難しさ

――社会情動的スキルを育てるうえでは、どのような課題があるのでしょうか。

太田　目に見えにくい力の大切さについて、保護者の理解を得ることの難しさを常々感じます。例えば、みんなで絵を描く時間に「今日は描きたくない」という子どもの意思を尊重したくても、それは保護者にはなかなか理解されません。日本人特有なのか、いわゆる横並びの状況に安心することが多く、例えばわが子の作品を他の子どものものと比べて、そのできばえに一喜一憂する様子が見られます。

中山　子どもの世界や保育の世界の言葉と保護者の考えには隔たりがあると考えて、きちんと「翻訳」して伝えることが必要だと思います。社会情動的スキルなど、目に見えにくいものはなおさらです。

私も若いときには、いろいろと失敗しましたね。入園してしばらくたった子どもの保護者を安心させようとして「園に慣れてきて、一日中、思いっきり遊んでいましたよ」と報告したら、「えっ、遊んでいただけですか？」と、逆に不安にさせてしまいました。その保護者にとって、遊びとは暇つぶしやレクリエーションくらいの意味だったんですね。絵画にしても、他の子と比べたり、大人の視点から上手、下手を判断したりしがちですので、子どもが自分らしく表現することの大切さを保護者に何度も伝えています。

秋田　保護者は、園では常に多彩な遊びが提供されていると思いがちですが、実際はいくつかの遊びの連続ですよね。しかし、毎日、何気なくやっているように見える遊びは、子どもの中で着実に積み重ねられています。例えば、黙々と砂遊びをしていた子どもが、最後には左右対称のきれいな飾りつけを施した砂のケーキを完成させる。そういう遊びが、達成感ややり遂げる力につながるのだと思います。園は明るく楽しいだけではなく、実際には、つらかったり、苦しかったり、もどかしかったり、子どもの多様な感情が生まれ、それらの経験を含めて成長がもたらされるのです。そうした保育のねらいについて理解を促すためには、園が子どもの預かり場所として機能するだけではなく、保育参加などを通し、保護者にも園の一員として関わってもらうことが有効でしょう。

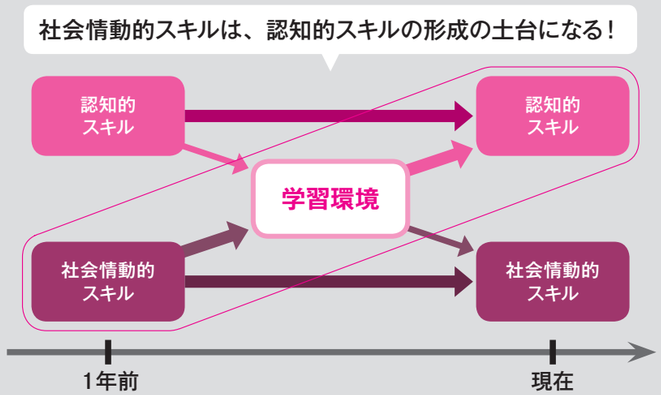
中山　保護者に園の「身内」「味方」になってもらうことは大切ですよね。保護者と園の関係が、消費者とサービス提供者の関係にならないような戦略的な仕組みが必要だと思います。立場は異なりますが、目の前の子どもの幸せを願わない大人はいませんから、必ず一致して協力できるはずです。

実はうちの園は、20年ほど前に私が園長に就任したのを機に、現在の遊び中心の保育へと大きく転換しましたが、当初はなかなか保護者の理解が得られず、苦悩の時期が続きました。あるとき、子ども主体の劇を発表して「よい劇だった」と満足していたら、保護者アンケートで「内容がない」と酷評されました。それに対して詳しく反論すると、批判が倍になって戻ってきたのです。そしてどんな意見も、まずは受け入れることが対話の始まりだと学びました。

保護者との関係づくりは、一朝一夕にはいきません。「一緒に課題を解決しましょう」というスタンスで働きかけるうちに、しだいに苦情ではなく意見が寄せられるようになり、園運営の舵取りの方向性が定まってきました。社会情動的スキルというテーマに限らず、保護者との関係づくりは、これからの園運営における最大のポイントのひとつだと思います。

図4

OECD発 幼児期に社会情動的スキルを育てる重要性



〈出典〉1. 米国 (NLSY,PSID):Cunha and Heckman (2008) and Cunha, Heckman,and Schennach (2012)
2. 韓国 (KYPS):OECD (2015)

◎図の中の太い矢印は、細い矢印に比べ、強い関係があることを示します。社会情動的スキルのレベルが高いと、学習環境をより有効に生かすことができ、社会情動的スキルだけではなく、認知的スキルもさらに大きく伸びることがわかりました。社会情動的スキルは、認知スキルの土台となるというわけです。このことは、幼児期に社会情動的スキルを育むことの意味につながっています。

▶社会情動的スキルについては P.12 もあわせてご覧ください。

常に保育のねらいを確認して保育者の間で保育観を共有

秋田　保護者に限らず、保育者間での保育観の共有も難しいテーマだと思います。太田先生の園では、その点で課題はありますか。

太田　うちの園はもともと公立でしたが、民営化された際にいろいろな価値観や保育観をもつ保育者が集まってきました。そのため、当初から園長は「みんなで話し合って園をつくり上げていく」という姿勢を貫いており、若手も自由に発言できる仕組みや雰囲気があります。例えば、話し合いの前にメールでテーマが送られてきて、あらかじめみんなが考えをメーリングリストで出し合い、話し合いで意見を出しやすくなっています。そうした場でみんなが心を開いて考えを共有し、少しずつ同じ方向を向くようになってきました。

中山　私の園では、保育者の考えがぶつかったときは、保育のねらいを確認しています。ねらいさえ共有していれば、保育の内容が異なっても、大きな問題は生じませんから。ねらいが一緒ということは、子ども観や保育観もほぼ同じと考えることもできます。

今後、実践を深めていくために

子どもの幸せを願い みんながハッピーになれる目標を

――今後、社会情動的スキルを伸ばすという視点から保育の質を高めようとする園は、どのようなことを心がけるといいでしょうか。

秋田　まず、保育の質の向上を目指す限り、園から課題がなくなることはないとお考えください。課題を自覚して解決を目指すことが、保育の質の向上を支えます。自分の園には課題がなく、社会情動的スキルも十分に育っており、「今のままでいい」と考えるのなら、それ自体が問題と言えます。

保育の質を向上させるためには、保育者自身の社会情動的スキルを伸ばすことも大事です。保育者が異質な人と意見を交わし、他者との価値観の共通点や相違点を知り、自分のよさを自覚する。そして、それぞれの保育者が自立性を保ち、目標をもって、その人らしくふるまえる環境を園長が先頭に立って用意することが重要でしょう。

子どもたちの社会情動的スキルを伸ばすためには、前述したように、自園の子どもの実態に即し、自分たちの言葉で目指す姿を考えるといいでしょう。子どもを幸せにすることが保育の最終的な目的ですから、「こういう姿が見られたらすてきだよね」などと、できればみんながハッピーになれる目標をもって取り組みを深めていただきたいと思います。

中山　子どもの幸せのための保育という視点は、私も大事にしています。大多数の保護者は、幼児期には知的な教育を優先するより、優しさや協調性や自分らしさを育てたいという考えをもっています。それは、保護者自身もわが子に社会情動的スキルが育つのを望んでいることの表れでしょう。また、かつてはよい大学に進み、大企業に勤めるといったレールにのることがよいと考えられたこともありましたが、現代ではそれが幸せとは限らないことは、保護者もよくわかっています。そのことを考えても、今後は社会情動的スキルの重要性がますます高まるはずです。

世の中が忙しくなっていますが、案外、子どもも忙しいものです。社会情動的スキルを伸ばすためには、何かに没頭する十分な時間を保証することが不可欠と言えるでしょう。行事を厳選するなどして保育の活動が盛りだくさんにならないように注意し、子どもが自由に遊べる時間を確保するように努めたいと思います。

太田　私からは、今後心がけたいことをお話しさせてください。今日の座談会を通して、自園の保育目標である「自分で考えて行動できる子ども」「好きなことを見つけて楽しめる子ども」「自分もまわりの人やものも大切にできる子ども」は、社会情動的スキルという視点から考えても、よくできていると改めて気づきました。保育目標が掲げる子どもの姿を実現するために何をすべきかを考え、実践したいと思います。

――今後の幼児教育を考えるうえで非常に示唆に富むお話を多くいただきました。本日はどうもありがとうございました。

事例

子どもの未来につながる、目に見えにくい「心」の育ちを見える化し、保護者と共有

認定こども園　せんりひじり幼稚園（大阪府・私立）

社会情動的スキルを育むために重要な遊びを通し、
「心」の成長を大切にするせんりひじり幼稚園。心の育ちは目に見えにくいからこそ、
保護者にわかりやすく伝える必要があると考え、写真や文章を使って表現する取り組みを始めました。
その結果、保護者の保育への理解が深まり、一緒に子どもを育てる関係が生まれています。

保護者が子どもの育ちの見通しをもつようになった

成長が表れる場面を切り取り写真と文章で具体的に伝える

せんりひじり幼稚園は、遊びを中心とした保育を通して、「心」を育てる教育に力を入れています。遊びの中で試したり、工夫したり、新たな発見をしたり、友だちと一緒に考えたり…といった多様な経験を通し、「心情・意欲・態度」は育つと考えているためです。そうした成長の土台となるのは自己肯定感だと、園長の安達譲先生は話します。

「自分は自分であっていいという『存在することの自信（自己肯定感）』がしっかりと育つと、自分らしさを存分に発揮し、友だちと一緒に遊ぶ楽しさを感じて、次第に『できることの自信（自己有能感）』が高まっていきます」

保育者は日々の保育を通して、自己肯定感をはじめとした心の育ちを感じ取っています。しかし、子どもの発達段階について理解していない保護者には、目に見えない心の成長が伝わりにくいという課題がありました。そこで、園の方針と保護者の思いに齟齬（そご）が生じることを防ぐため、2012年から一人ひとりの「ポートフォリオ」を作成して成長の様子を伝えています（写真１）。

認定こども園
せんりひじり幼稚園
園長
安達　譲先生

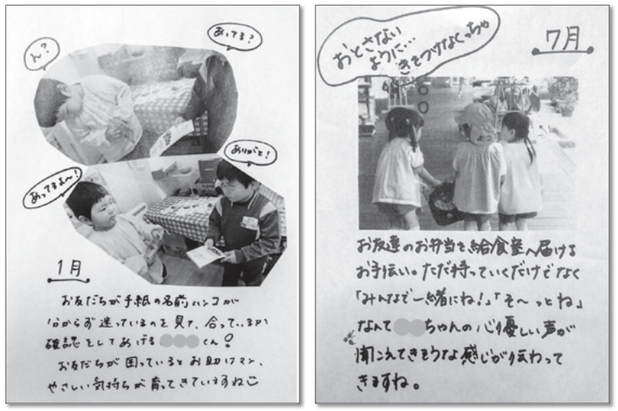


写真1● 子ども一人ひとりの「ポートフォリオ」
吹き出しなどを用いて子どもの内面が見えるように表現し、心の成長を伝えます。保護者に子どもの姿を伝えるとともに、園が大切にする保育方針への理解を促すこともねらいです。

ポートフォリオは、子どもの成長が伝わる写真とともに、状況や子どもの思いを文章にまとめたもので、月１回作成して保護者に渡しています。吹き出しで子どもの思いや考えを表現するなどして、保育者が読み取った子どもの内面をわかりやすく伝えていることが特徴です。

もともとポートフォリオは、子どもの理解を深める研修の一環として作成していました。

「写真を題材にして子どもの思いや成長について語り合う中で、保育者の子ども理解が進み、保育観も共有できました。この手法を活用すれば、保護者との間でも子どもに対する考え方や見方を共有できると考えました」（安達先生）

ポートフォリオで取り上げる場面は、友だちと話し合っている光景や、ひとり遊びに集中する姿など、それぞれの子どもの興味や性格、発達状況などに応じて選んでいます。

「保護者は、わが子のよさより心配な点が目につきやすいものです。そこで、保育者から見た子どものよさとして肯定的に伝えています。例えば、『友だちと活発に遊べない』と悩む保護者に、ひとり遊びに没頭する姿の写真とともに、『ひとりでじっくりと集中できる姿がすばらしい』と伝えると、保護者は子どもを肯定的に捉え直します」（安達先生）

ポートフォリオを継続するうちに、保育者自身の意識も変化してきたそうです。毎日、カメラを持って成長が表れている場面を探す中で、子ども理解が深まるとともに、子どもの姿を肯定的に捉える姿勢が強まったと言います。

若手の保育者も自信をもって取り組めるようにする育成や配慮も欠かしません。

「保育者が堂々と『子どものこの姿が良かった』と発信できるためには、『自分の考えを受け入れてくれる』と、同僚に対して保育者自身が安心感を抱いていることが大切です。そのために、子どもの捉え方や写真の撮り方を教えるほかに、新人研修などで気持ちの面のサポートも充実させています」（安達先生）

紙芝居を通して年間の発達の流れを説明する

さらに2013年、子どもの発達の流れを具体的なイメージをもって理解してもらうため、年度初めの保護者会で紙芝居を使って子どもの成長過程を説明する試みを始めました。

紙芝居（写真２）は年齢ごとに、４月から３月までの成長の様子を写真と文章で表した作品です。ポートフォリオは個人に焦点を当てますが、紙芝居は各年齢の育ちを象徴する場面を取り上げています。この紙芝居はイチから作るのではなく、教育課程をもとにしているのが特徴です。

「次第に保育者との信頼関係に支えられ、自分らしく遊ぶようになり、いろいろな友だちや環境に出会って成長していく…。そんな子どもの育ちの見通しをもつことにより、子ども理解が深まり、保護者自身も育っていきます」（安達先生）

ポートフォリオや紙芝居を通し、園が大切にする育ちについて説明することで、以前にも増して園と保護者との関係は良好になったと言います。保護者アンケートでは、園の方針について「よくわかる」「わかる」と答えた保護者は、以前は90％程度でしたが、情報発信を強化してからは95％以上に達しています。

写真2● 年間の発達の流れがわかる紙芝居
発達過程を説明する紙芝居は、12カ月分を連続して見せて、育ちの見通しをもってもらいます。子どもの言葉などから、成長の様子が具体的にイメージできるようにしています。写真は3歳5月のもの。

「以前は、園の考えや子どもの姿が十分に理解されていないことから、指摘や要望、場合によっては苦情につながることもありました。いろいろな理解が深まった今は、園と保護者の双方に一緒に子どもを育てているという感覚が強まっていると感じます」（安達先生）

園では、今後も情報発信を通して思いを共有する取り組みを大切にしていく考えです。

「保育者の中に『子どものすてきな姿を発信することが楽しい』という気持ちがなければ、取り組みは深まりません。園全体で子どもを肯定的に捉える風土をより強めていきたいと思います」（安達先生）

認定こども園　せんりひじり幼稚園

◎1923（大正12）年に創立のひじり幼稚園の姉妹園。創立以来、遊びの中の学びを通し、自己肯定感とともに生きる力を育てる「心」の教育を実践している。

園長　安達譲先生
所在地　大阪府豊中市新千里北町3-2-1
園児数　435人（3～5歳）

ベネッセ教育総合研究所・OECD共同シンポジウム

今注目される「社会情動的スキル」について世界と日本の最新の知見を報告するシンポジウムを開催しました

幼児期・児童期に育てるべき資質・能力として世界的に関心が高まる「社会情動的スキル」。
その最新の研究成果を発表するシンポジウム「子どもの未来につながる社会情動的スキルとは？それを育む環境とは？」が、2015年3月13日、東京大学内福武ホールで開催されました。
当日の講演やパネルディスカッションの様子を紹介します。

第1部　世界における社会情動的スキル研究報告

パーソナリティ心理学を研究するカリフォルニア大学バークレー校のオリバー・P・ジョン博士、ならびにOECD教育スキル局の宮本晃司氏のお二人が、社会情動的スキルに関する最新の知見を報告しました。

子どもの未来につながる社会情動的スキルとは？

オリバー・P・ジョン博士
カリフォルニア大学
バークレー校心理学部教授

◎社会情動的スキルは5つに分類できる

社会情動的スキルは多様で複雑であり、ある研究者は160のスキルを挙げるほどだ。それを統計的に分類すると、「Openness（開放性）」「Conscientiousness（勤勉性）」「Extraversion（外向性）」「Agreeableness（協調性）」「Negative Affect vs. Emotional Stability（否定的感情 vs. 情緒安定性）」の5つに分けられ、これらは「ビッグファイブ」、またはそれぞれの頭文字から「OCEAN モデル」と呼ばれる。

◎社会情動的スキルをどう測定するか

社会情動的スキルは、相対的にIQとは関連がない（無相関）。また、多くの研究者によって見いだされており、文化や言語コミュニティを超えて存在していることなどが特徴と言える。測定方法には、質問紙調査や実験、面接、観察などがある。5歳から7歳は、協調性や勤勉性が高まる重要なタイミングのひとつであり、測定時期として適している。また成人としてのアイデンティティを形成し始める10歳から18歳も重要だ。10代は協調性と勤勉性が低下する傾向があるが、大学生になる頃にもとに戻ることも多い。

社会情動的スキルを育む環境について

宮本晃司氏
OECD教育スキル局・
「教育と社会発展」事業マネージャー

◎社会情動的スキルの形成過程は登山に似ている

社会情動的スキルの形成過程は、山登りに似ている。登山の前には、最低限の登山ルート・天候の情報、健康状態の把握といった認知的スキルに加え、勇気や自信などの社会情動的スキルが求められる。登山の過程でこれらのスキルはさらに強化され、困難さが増すほど、コミュニケーション、注意力、忍耐力などのスキルも形成される。無事に山頂に到達したら、登山メンバーとともに体験を振り返り、学んだことを刷り込むことにより、さらに社会情動的スキルが定着していく。

◎園・学校、家庭、地域の3方向からのアプローチ

社会情動的スキルは段階的に形成されるため、持続的な教育投資が有効だ。初めのスキルが大きいほど、その後の新たな教育環境を有効に生かすことができ、さらにスキルが発達する。つまり、幼児期に社会的にも教育投資を行い、このスキルを早期から育成することは非常に重要だ。社会情動的スキルの育成は、園・学校、家庭、地域の3つのベースが考えられる。特に家庭ベースでは、家庭内の行事や習慣を通して、親子のアタッチメント（愛着）を強化することが基本となる。

第2部　日本における幼児期の「学びに向かう力」研究報告

日本の保育現場において、社会情動的スキルに通じる「学びに向かう力」は、どのように育まれてきたのでしょうか。ベネッセの調査結果に続き、保育の研究者が現状の分析と今後の課題を提示しました。

「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」報告（2014年）

高岡純子
ベネッセ教育総合研究所
次世代育成研究室 室長

幼児期から小学1年生の保護者を対象として、家庭での生活習慣や養育態度がどのように「学びに向かう力」に影響しているかを調査した。その結果、「3歳児において基本的な生活習慣をもつことが大切」「小学校以降の学習の土台となる文字・数・思考の力は、その前提に学びに向かう力の育ちがあり、それを幼児期に育成することが重要」「幼児期の生活習慣、学びに向かう力、文字・数・思考の力には、保護者の養育態度が影響する」「親子で一緒に行う知的なやりとりの遊びは、学びに向かう力と関係がある」ことが明らかになった。

「学びに向かう力」とは何か？

幼児期の学びの3つの軸 ＝ 小学校以降の学習や生活に適応するために求められる幼児期の学び

学びに向かう力 ＝ 社会情動的スキル（非認知的スキル）

文字・数・思考＝認知的スキル

（例）

好奇心	わからないことについて、「なぜ？」「どうして？」など、まわりに質問ができる
協調性	遊びなどで友だちと協力することができる
がんばる力	物事をあきらめずに挑戦することができる
自己統制	自分がやりたいと思っても人のいやがることはがまんできる
自己主張	人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる

小学校以降の学習や生活の土台となる力で、「好奇心」「協調性」「がんばる力」「自己統制」「自己主張」などの要素が含まれる。社会情動的スキルと重なる部分が大きい。

パネルディスカッション「幼児期に望ましい学びと環境とは？」

秋田喜代美氏
東京大学大学院教授

日本の保育は、これまでも社会情動的スキルに通じるエモーショナルな力を重視してきた。だからといって、これまで通りの保育でよいわけではなく、グローバル化、少子化などの社会の変化に合わせて保育現場も向上していかなくてはならない。

大豆生田啓友氏
玉川大学教授

社会情動的スキルを育成するうえで、子ども主体の協同的な活動がますます重要になる。ある園では、草花の汁を用いた香水作りを通し、子どもどうしが対話し、探究していた。協同的な学びが生まれる保育のあり方が全国の現場で模索されている。

無藤隆氏
白梅学園大学教授

幼児期は喜怒哀楽を十分に感じたうえでプラスの感情に転化することで情意（情緒）の育ちをもたらすことが大事だ。幼児教育は、子どもを自覚へと向かわせ「言葉」を与える教育と考えられ、自覚に至るプロセスで大切なのが「対話」である。

今、なぜ社会情動的スキルが求められているのか。

宮本氏　個人のみならず、国家の形成の根幹となるもので、これまでも重視されてきた。ここ数年、研究の進展によって多くのエビデンスが登場し、育成のノウハウがまとまってきたため今注目を集めている。

大豆生田氏　昔から日本では社会情動的スキルの育成が行われてきたが、さらに力を入れる必要がある。幼児教育に目に見える成果を求める風潮もある中、その方法や成果をどう提示できるかが課題だ。